

陽炎座

泉鏡花作

—

「此處だ、此の音なんだよ。」

帽子も靴も艶々と光る、三十ばかりの、然るべき  
會社か銀行で當時若手の利けものと云つた風采。一  
ツ、容子は似つかはしく外國語で行かう、ヤングゼ  
ントルマンと云ふのが、其の同伴の、一すらりと  
して派手に鮮麗な中に、扱帯の結んだ端、羽織の裏、  
襖はづれ、目立たないで、ちら／＼と春風にちらめ  
く處々に薄りと蔭がさす、何か、もの思か、惱が身  
にありさうな、ぱつと咲いて淺く重る花片に、曇の  
ある趣に似たが、風情は勝る、花の香は其の隈から、  
幽に、行違ふ人を誘うて時めく、薰を籠めて、藤、  
菖蒲、色の調ふ一枚小袖、長襦袢。其のいづれも彩  
絲は使はないで、ひとへに淺みどりの柳の葉を、針  
で運んで縫つたやうに、姿を通して涼しさの靡くと  
同時に、袖にも襖にもすら／＼と寂しの添つた、瘦  
せぎすな美しい女に、一今のを、ト言掛けると、

婦人は黙つて頷いた。

が、最う打頷く咽喉の影が、半襟の縫の薄紅梅に  
白く映る。・・・

あれ見よ。此の美しい女は、其の膚、其の簪、其  
の指環の玉も、とする端々透通つて色に出る、心の  
影がほのめくらしい。

「此處だ、此の音なんだよ。」

婦人は同伴の男に然う言はれて、時に頷いたが、  
傍で此を見た松崎と云ふ、緋の羽織で、島打を被つ  
た男も、共に心に頷いたのである。

「成程此だらう。」

但し、松崎は、男女、其の二人の道づれでも何で  
もない。當日唯一人で、龜井戸へ詣でた歸途であつ  
た。

住居は本郷。

江東橋から電車に乗らうと、水のぬるんだ、草萌  
の川通りを陽炎に纏れて来て、長崎橋を入江町に掛  
る頃から、何處ともなく、遠くで鳴物の音が聞えは

しめた。

松崎は、橋の上に、欄干に恚れて、少時イんで聞  
入ったほどである。

ちやんちきノ、面白さうに噓すかと思ふと、急に  
修羅太鼓を摺鉦交り、どんどんぢやぢやんと鳴らす。  
龜井戸寄りの町中で、屋臺に山形の段々染、鋳頭巾  
で、いろはを揃へた、義士が打入りの石版繪を張廻  
はして、よぼノ、の飴屋の爺様が、皺くたのまくり  
手で、人寄せに其の鉦太鼓を敲いて居たのを、些と  
前に見た身にも、珍らしく響いて、氣をそゝられ、  
胸が騒ぐ、ばつたり又激しいのが静まると、ツンツ  
ンテンレン、ツンツンテンレン、悠々とした絲が聞  
えて、……本所驛へ、がたくた引込む、石  
炭を積んだ大八車の通るのさへ、馬士は銜煙管で、  
しゃんノ、と轡が揺れさうな合方と成る。

絶えず續いて、音色は替つても、噓子は留まらず、  
行交ふ船脚は水に流れ、蜘蛛手に、角ぐむ蘆の根を  
潜つて、消えるかとすれば、ふはノ、と浮く。浮け  
ば蝶の羽の上になり下になり、陽炎に乗つて揺れな

がら近づいて、日當の橋の暖い袂にまつはつて、ちやんちき、などゝ浮かれながら、人の背中を、トンと一つ軽く叩いて、すいと退いて、

ーおいで、おいでー

と招いて居さうで。

手に取れさうな近い音。

はつ、と其の手を出すほどの心に成ると、橋むかうの、屋根を、ひよい／＼と手踊り雀、電信柱に下向きの傾り燕一羽氣まぐれに浮いた鴟が、何處かの手飼ひの鶯交りに、音を捕ふる人心を、はつと同音に笑ひでもする氣勢。

春たけて、日遅く、本所は塵の上に、水に浮んだ島かとはばかり、都を離れて静であつた。

屋根の埃も紫雲英の紅、臍のやうな汽車が過ぎる。其の響きにも消えなかつた。

松崎は、一汽車の轟きの下にも埋れず、何等か  
 妨げ遮るものがあれば、音となく響きとなく、翻然  
 と軽く體を躲はす、形のない、思ひのまゝに勝手な  
 音の湧出づる、空を舞繞る鼓に翼あるものらしい、  
 其の打囃す鳴物が、一方向つて、斜違の角を廣々と  
 黒塀で取廻はした片隅に、低い樹立の松を洩れて、  
 朱塗の堂の屋根が見える、稻荷様と聞いた、境内に、  
 何か催しがある・・・其の音であらうと思つた。  
 けれども、欄干に乘出して、も一つ橋越しに透か  
 して見ると、門は寢静つたやうに鎖してあつた。

何時の間にか、トチトチトン、のんきらしい響に  
 乗つて、驛と書いた本所停車場の建札も、驛と讀む  
 で、白日、菜の花を視むる心地。眞赤な達磨が逆斛  
 斗を打つた、忙がしい世の麵麩屋の看板さへ、遠い  
 鎮守の鳥居めく、田圃道でも通る思ひで、江東橋の  
 停留所に着く。

空いた電車が五臺ばかり、燕が行抜けさうにがら

んとして居た。

乗るわ、降りるわ、混合ふ人数の崩るゝ如き火水の戰場往來の兵には、餘り透いて、相撲最中の回向院が野原にでも成つたやうな電車の體に、聊か拍子抜けの形で、お望み次第の執れにしようと、大分歩行き廻つた草臥も交つて、松崎はトボンと立つ。

例の音は地の底から、草の蒸さるゝ如く、色に出で萌えて留まらぬ。

「狸囃子と云ふんだよ、昔から本所の名物さ。」

「あら、嘘ばかり。」

丁度其處に、美しい女と、其の若紳士が居合はせて、恚う言を交はしたのを松崎は聞取つた。

初は空音ではないらしい。

若紳士が言つたのは、例の、おいてけ堀、片葉の蘆、足洗ひ屋敷、埋藏の溝、小豆婆、送り提燈とともに、土地の七不思議に數へられた、幻の音曲である。

言つた方も戯に、聞く女も串戯らしく打消したが、  
松崎は、却つて、うつかりして居た傳説を、夢のや  
うに思出した。

興ある事かな。

日は永し。

今宮邊の堂宮の繪馬を見て暮したと云ふ、隙な醫  
師と一般、仕事に悩んで持餘した身體なり、電車は  
何時でも乗れる。

と成ると、家へ歸るには未だ早い。．．．何  
うやら、橋の上で聞いたよりは、此處へ來ると、同  
じの無い中にも、囃子の音が、間近に、判然した  
らしく思はれる。一つは、其の聲の響くのは、自分  
ばかりでない事を確めた所爲であらう。

其上、世を避けた仙人が碁を打つ響きでもなく、  
薄隠れの女郎花に露の音信るゝ聲でもない．．．  
・音色こそ違ふが、見世ものゝ囃子と同じく、氣  
をそつて人を寄せる、鳴ものらしく思ふから、傾  
く耳の誘はるゝ、寂しい横町へ電車を離れた。

むか 向つた日南の、背後は水で、思ひがけず一本の莖  
め 蒲が町に咲いた、と見た。．．．．其の美しい  
ひと 女の影は、分れた背中にひや／＼と染む。．．．．  
と、チャンチキ、チャンチキ、嘲けるが如くに囃  
す。．．．．

がら／＼と鳴つて、電車が出る。突如として、ど  
ん、ちゃん、ちゃん。ーぶら／＼歩行き出すと、  
ツンツンテンレン、ツンツンテンレン。



片側はどす黒い、水の淀んだ川に添ひ、がた／＼と物置が並んで、米俵やら、筵やら、炭やら、薪やら、其の中を蛇が這ふやうに、ちよろ／＼と鼠が縫ひ行く。

あの鼠が太鼓をたゝいて、鼈が笛を吹くのかと思つた。．．．．人通り全然なし。

片側は、右の其の物置に、たゞ戸障子を繋合はせた小家續き。で、一二軒、八百屋、駄菓子屋の店は見えたが、鴉も居らなければ犬も居らぬ。縄暖簾も居酒屋めく米屋の店に、コトンと音をさせて鶏が一羽歩行いて居たが、通りかゝつた松崎を見ると、高らかに一聲鳴いた。

太陽は闌に白い。

颯と、のんびりした雲から落かゝつて、目に眞蒼に映つた、物置の中の竹屋の竹さへ、茂つた山吹の葉に見えた。

町は其處から曲る。

と追分で路が替つて、木曾街道へ差掛る・・・  
左右戸毎の軒行燈。

此處にも、其處にも、ふら／＼と、春の日を中へ  
取つて、白く點したらしく、眞晝浮出て朦と明るい。  
いづれも御泊り木賃宿。

で、何の家も、軒より、屋根より、此が身上、其  
の晝行燈ばかりが目に着く。中には、廂先へ高々と  
燈籠の如くに釣つた、白看板の首を擡げて、屋臺骨  
は地の上に獣の如く這つたのさへある。

吉野、高橋、清川、槇葉。寢物語や、美濃、近江。

こゝにあはれを留めたのは屋號にされた遊女  
達。・・・一寸柳が一本あれば滅びた自晝の  
廓に齊しい。が、夜寒の代に焼盡して、塚のしろし  
の小松もあらず・・・荒寥として砂に人なき  
光景は、祭禮の夜に地震して、土の下に埋れた町の、  
壁の肉も、柱の血も、其のまゝ一落の白髑髏と化し  
果てたる趣あり。

絶壁の躑躅と見たは、崩れた壁に、ずた／＼の襪

裸のみ、猿曳が猿に着せるであらう。

生命を搦む棧橋から、危く傾いた二階の廊下に、  
日も見ず、背後むきに鼠の布子の背を曲げた、首の  
色の蒼い男を、フト一人見附けたが、軒に掛けた蜘蛛の圍の、ブトリと膨れた蜘蛛の腹より、人間は瘦せて居た。

こゝに照る月、輝く日は、兀げた金銀の雲に乗つた、土御門家一流易道、と眞赤に目立つた看板の路地から迫出した、其ばかり。

空を見るさへ覗くやう、軒行燈の白いにつけ、側の屋根は薄暗い。

此の春の日向の道さへ、寂びれた町の形さへ、行燈に似て、然も其の白けた明に映る・・・

表に、御泊りとかいた字の、其影法師のやうに、町幅の眞たゞ中とも思ふ處に、曳棄てたらしい荷車が一臺、屋臺を乗せてガタリとある。

近いて見ると、否、荷の蔭に人が居た。

男か、女か。

唯、見た體は、褪せた尻切の茶の筒袖を着て、袖を合はせて、手を拱き、紺の脚絆穿、草鞋掛の、細い脚を、車の裏へ、蹈揃へて、衝と伸ばした、抜衣紋に手拭を巻いたので、襟も隠れて見分けは附かぬ。編笠、ひたりと折合はせて、紐を深く被つたなりで、がつくりと俯向いたは、何うやら坐眠りをして居さう。

城の繩張りをした體に、車の轆の中へ、きちんに入つて、腰は床凡に落したのである。

飴屋か、豆屋か、團子を賣るか、いづれにも荷が勝つた……おでんを賣るには乾いて居る、其の看板がおもしろい。……

四

屋臺の正面を横に見せた、  
両方の柱を白木綿で巻  
立てたは寂しいが、左右へ渡して紅金巾をひらりと  
釣つた、下に横長な掛行燈。

- 坂東よせ鍋
- 尾上天麩羅
- 大谷おそば
- 市川玉子焼
- 片岡椀盛
- 嵐お萩
- 坂東あべ川
- 市村しる粉
- 澤村さしみ
- 中村洋食

初日出揃ひ役者役人車輪に相勤め申候

名の上へ、藤の花を末濃の紫。口上あと餘白の處

に、赤い福面女に、黄色な瓢箪男、蒼い般若の可恐  
い面。黒の松茸、淺黄の蛤、一寸蝶々もあしらつて、

霞を薄くぼかしてある。

引寄せられて慕つて来た、雛子の音には、此だけ  
氣の合つたものは無い。が、松崎は讀返して見て苦  
笑ひした。

坂東あべ川、市村しるこ、渠はあまい名を春狐と  
號して、福面女に、瓢箪男、般若の面、  
二十五座の座附きで駈出しの狂言方であつたか  
ら。――

「串戯ぢやないぜ。」

思はず、聲に出して獨言。

「親仁さん、おう、親仁さん。」

なぞのものぞ、此處に木賃の國、行燈の町に、壁  
を抜出た樂がきの如く、陽炎に顯れて、我を諷する  
が如き淺黄の頭巾は？

屋臺の様子が、小兒を對して新粉細工を賣るらし  
い。片岡牛鍋、尾上天麩羅、其處へ並べさせて見よ  
う了簡。

「おい、お爺い。」

と閑なあまりの言葉がたき。故と中ツ腹に呼んで見たが、寂寞たる事、くろんぼ同然。

で、操の絲の切れたが如く、手足を突張りながら、ぐたりと眠る・・・俗には船を漕ぐところ言へ、此は筏を流す體。

其に對して、其のまゝ松崎の分つた袂は、我ながら蝶が羽繕ひをする心地であつた。

まだ十歩と離れぬ。

其の物賣の、布子の圓い背中なぞへ、同じ木賃宿の其處が歪みなりの角から、町幅を、一息、苗代形の幅の廣く成つた處があつて、思ひがけず藁の堆い屋形が一軒。斜に中空をさして鯉の鱗の背を見るやう、電信柱に棟の霞んで聳えたのがある。

空屋か、知らず、窓も、門も、皮をめぐつた、面に齊しく、大な節穴が、二ツづゝ、がツくり窪んだ眼を揃へて、骸骨を重ねたやうな。

が、月には尾花か、日向の若草、廂に伸びたも春めいて、町から中へ引込んだゞけ、生ぬるいほどほ

か／＼する。

四<sup>あたり</sup>邊<sup>に</sup>に似<sup>おほ</sup>ない大<sup>ま</sup>構<sup>ま</sup>への空<sup>あき</sup>屋<sup>や</sup>に、一<sup>い</sup>二<sup>に</sup>間<sup>けん</sup>ばかりの  
船<sup>ふな</sup>板<sup>いた</sup>塀<sup>べい</sup>が、水<sup>みづ</sup>のぬるんだ堰<sup>ゐせき</sup>に見<sup>み</sup>えて、其<sup>そ</sup>の前<sup>まへ</sup>に、お  
玉<sup>たま</sup>杓<sup>じやく</sup>子の推<sup>おし</sup>競<sup>くら</sup>で群<sup>むら</sup>る状<sup>さま</sup>に、大<sup>おほ</sup>勢<sup>ぜい</sup>小<sup>こ</sup>兒<sup>ども</sup>が集<sup>たか</sup>つて居<sup>あ</sup>た。  
おけらの蟲<sup>むし</sup>は、もじや／＼もじやと皆<sup>みな</sup>動<sup>ど</sup>搖<sup>よ</sup>めく。  
其<sup>そ</sup>の癖<sup>くせ</sup>靜<sup>じゆう</sup>まつて聲<sup>こゑ</sup>を立<sup>た</sup>てぬ。

直<sup>ぢ</sup>き其<sup>そ</sup>の物<sup>もの</sup>賣<sup>うり</sup>の前<sup>まへ</sup>に立<sup>た</sup>ちながら、此<sup>こ</sup>の小<sup>ちひ</sup>さな群<sup>ぐん</sup>集<sup>じゆ</sup>  
の混<sup>こ</sup>合<sup>みあ</sup>つたのに氣<sup>き</sup>が附<sup>つ</sup>かなかつたも道<sup>だう</sup>理<sup>り</sup>こそ、松<sup>まつ</sup>崎<sup>さき</sup>  
は身<sup>み</sup>に染<sup>し</sup>みた狂<sup>きやう</sup>言<sup>げん</sup>最<sup>さい</sup>中<sup>ちゆう</sup>見<sup>けん</sup>ぶつ<sup>の</sup>ひつそりした棧<sup>さし</sup>敷<sup>き</sup>  
らを來<sup>き</sup>たも同<sup>おな</sup>じだと思<sup>おも</sup>つた。

役<sup>やく</sup>者<sup>しや</sup>は舞<sup>ぶ</sup>臺<sup>たい</sup>で飛<sup>と</sup>んだり、匆<sup>は</sup>ねたり、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>芝<sup>しば</sup>居<sup>ゐ</sup>が、  
ばた／＼ばた。



大當り、尺的に矢の刺つたゞけは新粉屋の看板よ  
 り念入なり。一面藤の花に、蝶々まで同じ繪を彩つ  
 た一張の紙幕を、船板塀の木戸口に渡して掛けた。  
 正面前の處へ、破筵を三枚ばかり、じと／＼したの  
 を敷込んだが、日に乾くか、怪い陽炎と成つて、む  
 ら／＼と立つ、其が舞臺。

取巻いた小兒の上を、鮒、鯰、黒い頭、緋鯉と見  
 たのは赤い切の結綿假髪で、幕の藤の花の末を煽つ  
 て、泳ぐや、うに視められた。が、近附いて見ると、  
 坂東、澤村、市川、中村、尾上、片岡、役者の連名  
 も如件、おそば、お汁粉、牛鍋なんど、紫の房の下  
 に筆ぶとに記してあつた……

松崎が、立寄つた時、カイ／＼カイと、丁ど塀の  
 内で木が入つて、紺の衣服に、黒い帯した、圓い臀  
 が、踵をひよい、と上げて、頭から其の幕へ潜つた  
 のを見た。――筵舞臺は行儀わるく、兩方へ歪んだ  
 が。

半月形に、ほか／＼とのぼせた顔して、取廻はした、小さな見物、わや／＼と又一動揺。

中に、目の鋭い屑屋が一人、箸と籠を両方に下げて、挟んで食へさうな首は無しか、とじろ／＼と睨廻はす。

最う一人、裕の引解きらしい、汚れた縞の單衣ものに、縋れ／＼の三尺で、頬被りした、づんぐり肥った赤ら顔の兄哥が一人、のつそり腕組をして交る・・・・

二人ばかり、十二三、四五ぐらゐな、子守の娘が、横ちよ、と猪首に小兒を背負つて、唄も唄はず、肩、背を揺る。他は皆、茄子の蔓に蛙の子。

樂屋――其の塀の中で、又力チ／＼と鳴つた。

處へ、通から、ばら／＼と駈けて來た、別に二三人の小兒を先に、奴を振らせた趣で、呀！あの美しい女と、中折の下に眉の濃い、若い紳士と並んで來たのは、浮世の底へ霞を引いて、天降つたやうに見えた。

此處だ、此の音だーと云つた其の紳士の言を聞いた、松崎は、矢張り渠等も囃子の音に誘はれて、男女の孰らが言出したか、其は知らぬが、連立つて、先刻の電車の終點から、ともに引寄せられて來たものだと思つた。

時に、其の二人も、松崎も、大方此の芝居の鳴物が、遠くまで聞えたのであらうと頷く。・・・・・囃子は其の癖、此處に尋ね當つた現下は何も聞えぬ。・・・・・

繪の藤の幕間で、木は入つたが舞臺は空しい。

「幕が長いぜ、開けろい。遣らねえか、遣らねえか。」

とづんぐり者の頬被は肩を揺つた。が、閉つたばかり、聊も長い幕間でない事が、自分にも可笑しいか、鼻先の手拭の結目を、ひこ／＼と遣つて笑ふ。様子か、思ひも掛けず、こんな場所、子供芝居の見物の群に來た、美しい女に對して興奮したものでしい。

實際、雲の青い山の奥から、淡彩の友染とも見る、  
名も知れない一輪の花が、細谷川を里近く流れ出  
で、淵の藍に影を留めて人目に觸れた風情あり。  
石斑魚が飛んでも松葉が散つても、其のまゝ直ぐに、  
すら／＼と行方も知れず流れよう、其を暫時でも引  
留めるのは、たゞ些とも早く幕を開ける外はない、  
と松崎の目にも見て取られた。

「頼むぜ頭取。」

頼被が又喚く。

恰も其の時、役者の名の餘白に描いた、福面女、  
 瓢箪男の端をばさりと捲ると、月代茶色に、半白の  
 ちよん鬘假髪で、眉毛の下つた十ばかりの男の兒が、  
 澁團扇の柄を引摺んで、ひよこりと登場。

「待つてました。」

と頬被が聲を掛けた。

奴は、とぼけた目をきよろんと遣つたが、

「ちえ、小道具め、爲やうがねえ。」と高慢な  
 口を利用して、尻端折りの脚をすつてん、勿ねるが如  
 く、二つ三つ、舞臺をくる／＼と廻るや否や、背後  
 向きに、ちよつきり結びの紺兵兒の出尻で、頭から  
 半身また幕へ潜つたが、すぐに摺抜けて出直したの  
 を見れば、うどん、當り屋とのたくらせた穴だらけ  
 の古行燈を提げて出て、筵の上へ、ちよんと直すと、  
 奴は其の蔭で、膝を折つて、膝開けに踏張りながら、  
 件の澁團扇で、ばた／＼と煽いで、臺辭。

「米が高値いから不景氣だ。媽々めに又叱られべ  
 いな。」

でも、些と含羞んだが、日に焼けた顔を眞赤に俯向く、同じ色した澁團扇、ばさ／＼ばさ、と遣つた處は巧緻いもの也。

「いよ、牛鍋。」と頬被。

片岡牛鍋と云ふのであらう、が、役は餛飩屋の親仁である。

チャーン、チャーン……幕の中で鉦を鳴らす。

——迷兒の、迷兒の、迷兒やあ——

呼ば／＼り連れると、ひよい／＼と三人出た……  
・團栗ほどの背丈を揃へて、紋羽の襟巻を頸に巻いた大屋様。月代が眞青で、鬢の膨れた色身な手代、うんざり鬢の侠が一人、此が前へ立つて、コトン、コトンと棒を突く。

「や、これ、太吉さん、」

と差配様聲を掛ける。中の青月代が、提灯を持替へて、

「はい、はい。」と返事をした。が、界限の荒

れた卵塔場から、葬禮あとを、引攪つて來たらしい、  
其の提灯は白張である。

大屋は、カーンと一つ鉦を叩いて、

「大分夜が更けました。」

「亥刻過ぎでございませう、……ねえ、

頭。」

「然うよね。」

と棒をコツン、で、くす／＼と笑ふ。

「笑ふな、眞面目に／＼、と頬被が又聲を掛

ける。

差配様が小首を傾け、

「時に、もし、迷兒、迷兒、と呼んで歩きます

が、誰其と名を申して呼びませいでも、分りますも

のでござりませうかね。」

「私もさ、思つてるんで、……何うもね、

唯恚う、迷兒と呼んだんぢや、前方で誰の事だか見

當が附くめえてね、迷兒と呼ばれて、はい、手前で

ござい、と顔を出す奴もねえもんでさ。」とうん

ざり鬢が引取つて言ふ。

「先づさね……其で闇がりから顔を出せば、飛んだ妖怪でござりますよ。」

青月代の白男が、袖を開いて、兩方を掌で壓へ、

「御道理でございませう。其がでございませうよ。」

はい、恚うして鉦太鼓で探搜に出ます騒動ではございませうが、捜されませう御當人の家へ、聲が聞えますやうな近い所で、名を呼びましては、表向の事でも極が悪うございませう。其も小兒や爺婆ならまだしも、取つて十九と云ふ妙齡の娘の事でございますから。」

と考へ、切れ、に臺辭を運ぶ。

其の内も手を休めず、ぱつ／＼と赤い團扇、火が散るばかり、此は鮮明。



青月代は辿々しく、

「で、ございますから、遠慮をしまして、名は呼びません、でございますが、おつしやる通り、たゞ迷兒々と喚きました處で分るものではございません。最う大分町も離れました、徐々娘の名を呼びませう。」

「成程々々、一御心附至極の儀。そんなら、此處から一つ名を呼んで捜す事にいたしませう。頭、音頭を願はうかね。」

「迷兒の音頭は遣りつけねえがね、まゝよ。・・・  
・・・差配さん、合方だ。」

チャーンと鉦の音。

「お稻さんやあ、ート此の調子かね。」

「結構でございますね、差配さん。」

差配は最一つ眞顔でチャーン。

「さて、呼聲に名が入りますと、何うやら遠い處で、幽に、はあい・・・・・」と可哀な聲。

「變な聲だあ。」

と頭は棒を揺つて震へる眞似する。

「此の方、總入齒で、若い娘の假聲だちね。いえさ、したが何となく返事をしさうで、大に張合が附きましたよ。」

「其の氣で一つ伸ばせうよ。」

三人此處で、聲を揃へた。チャーニー

「――迷兒の、迷兒の、お稲さんやあ・・・

と一列び、筵の上を六尺ばかり、ぐるりと廻る。

手足も小さく仇ない顔して、目立つた假髪の鬘ばかり。麥藁細工が化けたやうで、黄色い聲で長せた事、ものを云ふ笛を吹くか、と希有に聞える。

美しい女は、すつと薄色の洋傘を閉めた・・・

・ヴェールを脱いだやうに濃い淺黄の影が消える、と露の垂りさうな清い目で、同伴の男に、ト瞳を注ぎながら舞臺を見返す・・・其の様子が、少時立ちどまらうと云ふらしかった。

「鍋焼鍋鈍」

と高らかに、舞臺で目を眠るまで仰向いて呼んだ。

「・・・あゝ、腹が空いた、餛飩屋。」

「へい／＼、頭、難有うござります。」

うんざり鬢は額を叩いて、

「おつと、禮はまだ早からう。此から相談だ。ね

え、太吉さん、差配さん、ちよつびり暖まつて行か

うぢやねえかね。」

「賛成。」

と見物の頬被りは、反を打つて大に笑ふ。

仕種を待構へて居た、餛飩屋小僧は、此から、割

前の相談でもありさうな處を、もどかしがつて、

「へい、お待遠様で。」と急いで、澁團扇で三人

へ皆配る。

「早いんだい、まだゞよ。」

と差配に成つたのが地聲で甲走つた。が、それで

も、ぞろ／＼ぞろ／＼と口で言ひ／＼、三人、指二

本で搔込む仕形。

「頭、・・・御町内様も御苦勞様でございま

す。お捜しなさいますのは、お子供衆で？」

「小兒なものかね、妙齡でございますよ。」

「

」

と青月代が、襟を扱いて、些と色身で應答ふ。

「へい、お妙齡、殿方でござりますか、それとも

お娘御で。」

「妙齡の野郎と云ふ奴があるもんか、初厄の別嬪さ。」と頭は口で、ぞろり／＼。

「あゝ、さて、走り人でござりますの。」

「はしり人と云ふのぢやないね、同じやうでも、

いづれ行方は知れんのだが。」

と差配は、チンと洩をかむ。

美しい女の唇に微笑が見えた……

「何時の事、何處から、其のお姿が見えなく成り

ました。」

と饅飩屋は、澁團扇を筵に支いて、ト中腰に成つて訊く。

「差配は溜息と共に氣取つて頷き、

「何時、何處でと云つてね、お前、縁日の宵の口や、顔見世の夜明から、見えなく成つたと云ふのぢやない。其の娘はね、長い間煩らつて、寝て居たんだ。それから行方が知れなく成つたよ。」

子供芝居の取留めのない臺辭でも、些と變な事を言ふ。

「へい。」

舞臺の饅飩屋も異な顔で、

「それでは御病氣を苦になさつて、死ぬ氣で駈出したのでござりますかね。」

「壽命だよ。ふん、」と、も一つかんで、差配は鼻紙を袂へ落す。

「御壽命、へい、何にいたせ、それは御心配な事です。お怪我がなければ可うござります。」

「賽の河原は礫原、石があるから躓いて怪我をする事もあらうかね。」と陰氣に差配。

「何を言はつしやります。」

「否さ、饅飩屋さん、合點の悪い。其の娘は最う

亡く成つたんでございますよ。」と青月代が傍から  
言つた。

「お前様も。死んだ迷兒と云ふ事が、世の中にござりますかい。」

「六道の闇に迷へば、はて、迷兒ではあるまいか。」

「や、そんなら、お前様方は、亡者をお捜しなさりますのか。」

「其のための、此の白張提灯。」

と青月代が、白粉の白けた顔を前へ、トぶらりと提げる。

「搜いて、搜いて、暗から闇へ行く路ぢや。」

「ても・・・気味の悪い事を言ひなさる。」

「餛飩屋、何うだ一所に来るか。」

と頭は鬼の如く棒を突出す。

餛飩屋は、あツと尻餅。

引被せて、青月代が、

「ともに冥途へ連行かん。」

「來れや、來れ。」と差配は異變な聲繕。

一堪りもなく、餛飩屋はのめり伏した。澁團扇で、

頭を叩くと、ちよん鬚假髪が、がさ／＼と鳴る。

「占めたぞ。」

「喰遁げ。」

と囁き合ふと、三人の兒は、ひよいと躍つて、蛙のやうにボン／＼飛込む、と幕の蔭に聲ばかり。

「迷兒の、迷兒の、お稲さんやあー」

描ける藤は、どんよりと重く匂つて、おなじ色に、閃々と金絲のきらめく、美しい女の半襟と、陽炎に影を通はす、居周圍は時に寂寞した。樂屋の人数を、狭い處に包んだ所爲か、張紙幕が中ほどから、見物に向いて、風を孕んだか、と膨れて見える。此の影が覆蔽るであらう、破筵は鼠色に濃く成つて、踞み込んだ兒等の胸へ持上つて、蟻が四五疋、うよ／＼と這つた。が、何故か、物の本の古びた表面へ、一ー來れや、來れ。と假名でかきちらす形がある。

見つゝ松崎が思ふまで、來れや、來れ。と言つた差配の言葉は、怪しいまで陰に響いて、幕

の膨ふくらんだにつけても、誰だれか、大人おとなが居ゐて、蔭かげで聲こゑ

を助たすけたらしく聞きこえたのであつた。

見物けんぶつの兒等こどもは、神妙しんめうに、黙だまつて控ひかへた。

頬被ほくかぶりのづんぐり者ものは、腕うでを組くんで立たつたなり、こ

くり／＼と居眠ゐねむる・・・

盥うどん鈍屋やが、ぼやんとした顔かほを上げた。さては、差さし

置おいた荷にのかはりの行燈あんどんも、草紙さうしの繪ゑでは無ない。

蟻ありは隠かくれたのである。



## 九

「狐か、狸か、今のは何ぢやい、どえらい目に逢はせくさつた。」

と饅頭屋は板塀はづれに、空屋の大屋根から空を仰いで、茫然する。

美しい女と若い紳士の、並んで立つた姿が動いて、兩方木賃宿の羽目板の方を見向いたのを、一舞臺が寂しく成つたゝめ、最う歸るのであらうと見れば、然にあらず。

其處へ小さな縁臺を据ゑて、二人の中に、ちよんぼりとした鬚を俯向けに、揉手でお叩頭をする古女房が一人居た。

「さあ、何うぞ、旦那様、奥様、此へお掛け遊ばして。いえ、最う汚いのでございますが、お立ちなすつて在らつしやいますより、些とは増でございますます。」

と手拭で、ごし／＼拭ひを掛けつゝ云ふ。其の手で一所に持つて出たらしい、踏臺が一つに乗せてあるのを下へおろした。

「否、俺たちは、」

若い紳士は、手首白いのを舉げて、拂ひ退けさうにした。が、美しい女が、意を得たと云ふ晴やかな顔して、黙つて其のまゝ腰を掛けたので。

「難有う。」

渠も齊しく並んだのである。

「はい、失禮を。はい、はい、何うも。」と古女房は、まくし掛けて、早口に饒舌りながら、踏臺を提げて、小兒たちの背後を、ちよこ／＼走り、松崎の背後へ廻る。

「貴方様は、何うぞ此へ。はい、はい、はい。」

「恐縮ですな。」

豫て期したるものゝ如く猶豫はらず腰を落着けた、……松崎は、美しい女と其の連とが、去る去らないに係はらず、――舞臺の三人が鉦をチャーンで、迷兒の名を呼んだ時から、子供芝居は、兎に角此の一幕を見果てないうちは、足を返すまいと思つて居た。

聲々に、可哀に、寂しく、遠方を幽に、――そし

て幽冥いづめいの界さかひを暗やみから闇やみへ搜さが廻しまると言いつた、厄やく年どし十九の娘むすめの名なは、お稻いなと云いつたのを鋭すどく聞きいた――仔細しさいあつて忘わすれられぬ人ひとの名ななのであるから。――

「おかみさん、此この芝居しばゐは何どう云いふ筋すぢだい。」

「はい／＼、否いゝえ、貴下あなた、子供こどもが出でたらめに致いたしますので、取留とりとめはございませぬよ。何なんの事ことでござい  
ますか、私わたしどもには一向かうに分わかりませぬ。其それでも稽古けいこ  
だの何なんのと申まをして、其それは騒さわぎでございましてね、は  
い、はい、はい。」

で手てを揉もみ手てを揉もみ、正ま面とには顔かほも上あげずに、ひ  
よこ／＼して言いふ。這この古ふる女房にようぼうは、くたびれた藍色あゐいろ  
の半纏はんてんに、茶ちやの着きもので、紺足袋こんたびに雪駄穿せつたばきで居ゐたの  
である。

「馬鹿ばかにしゃがれ。へッ、」

と唐突だしぬけに毒どくを吐はいたは、立睡たちねむりで居ゐた頬被ほくかぶりで、  
彌藏やざうの肱ひぢを、ぐい／＼と懐中ふところから、八八やツ當あたりに突つ  
掛かけながら、

「人ひと、面白おもしろくもねえ、貴方あなた様さまお掛かけ遊あそばせが聞き  
て呆あきれら。おはいはい、襟許えりもとに着つきやがつて、へッ。

俺の方が初手ツから立つてるんだ。衣類に脚が生え  
やしめえし . . . . . 草臥れるんな  
ら、此方が前だい。服装で價値づけをしゃがつて、  
畜生め。あゝ、人間下りたくはねえもんだ。」

古女房は聞かない振で、ちよこ／＼と走つて退  
た。一體、縁臺まで持添へて、何處から出て來たの  
か、其は知らない。然うして引返したのは町の方。  
其處に、先刻の編笠目深な新粉細工が、出岬に霞  
んだ捨小舟と云ふ形ちで、寂寞としてまだ一人居る。  
其の方へ、ひよこ／＼行く。  
ト頬被りは、じろりと見遣つて、  
「状あ見ろ、巫女の宰相。活きた兄哥の魂が分る  
かい。へツ、」と肩をしゃくりながら、ぶらりと見  
物の群を離れた。

次手に言はう、人間を挟みさうに、籠と竹箬を構  
へた薄氣味の悪い、默然の屑屋は、古女房が、其方  
側の二人に、縁臺を進めた時、ギロリと踏臺の横穴  
を覗いたが、それ切りフイと居なく成つた。 . . .

•  
•

一枚まいの肩くわも無い。  
いま、腰こしを掛かけた踏ふ臺みだいの中なかには、  
ト松崎まつざきが見みても

「おい、出て来ねえな、おほ、大入道、出ぢやねえか、遅いなあ。」

少々舞臺に間が明いて、魅まれたなりの鬚小僧は、てれた顔で、幕越しに樂屋を呼んだ。幕の端から、以前の青月代が、黒坊の氣か、俯向けに假髪ばかりを覗かせた。が、其處の繪の、狐の面が抜出したとも見えるし、古綿の黒雲から、新粉細工の三日月が覗くとも視められる。

「未だぢやねえか、まだお前、其の行燈がゞみに成らねえよ……科が抜けてるぜ、早く演んねえな。」

と云つて、すぼりと引込む。――はてな、行燈が、かゞみに化ける……と松崎は地の凸凹する蹈臺の腰を乗出す。

同じ思ひか、面影も映しさうに、美しい女は凝と視た。ひとり紳士は氣の無い顔して、反身ながらぐつたりと凭掛つた、杖の柄を手袋の尖で突いたものなり也。

餛飩屋は、行燈に向直ると、誰も居ないのに、一人で、へた／＼と挨拶する。

「光来なさいまし。．．．直ぐと暖めて差上げます。今、もし、飛んだお前さん、馬鹿な目に逢ひましてね、火も臺なしでござります。へい、辻の橋の玄徳稻荷様は、御身分柄、こんな悪戯はなさりません。狸か獺でござりませう。迷兒の迷兒の、一と鉦を敲いて来やがつて、餛飩を八杯攫らひました．．．お前さん。」

と滑稽た眉毛を、寄せたり、離したり、目をくしや／＼と饒舌つたが、

「や、一言も、お返事なしだね、默然坊様。鼻だの、口だの、ぴこ／＼と動いてばかり。．．．あれ、誰か客人だと思つたらー私の顔だー道理で、兄弟分だと頼母しかつたに。．．．宙に流れる川はなしー七夕様でもないものが、銀河には映るまい。星も隠れた、眞暗、」

と、仰向けに、空を視る、と仕掛けがあつたか、頭の上の其の板塀越、幕の内から潜らして、兩方を竹で張つた、眞黒な布を一張、筵の上へ、ふはりと投げて颯と擴げた。

唯見て、知りつゝ松崎は、俄然として雲が湧いたか、と恟乎とした、――電車はあつても――本郷から遠路を掛けた當日。麗さも長閑さも、餘り積つて身に染むばかり暖かさが過ぎたので、思ひがけない俄雨を憂慮めではなかつた處。

彼方の新粉屋が、ものゝ遠いやうに霞むにつけても、家路遙かな思ひがある。

また、餘所は知らず、目の前の雑と劇場ほどな其の空屋の裡には、本所の空一面に漲らす黒雲は、疊込むで餘りあるが如くに見えた。

暗い舞臺で、小さな、而して爺様の餛飩屋は、おつかな、吃驚、わな／＼大袈裟に震へながら、  
「何に映る・・・私が顔だ、――行燈か。まさかとは思ふが、行燈か、行燈か？・・・返事をせまいぞ。此の上手前に口を利かれては叶はねえ。何分頼むよ。・・・面の皮は、雨風にめくれたあとを、幾度も張替へたが、火事には人先に持つて遁げる何十年以來の古馴染だ。

馴染がひに口を利くなよ、私が呼んでも口を利くなよ。はて、何に映る顔だ知らん。・・・口を



利きくな、口くちを利きくな。」

・ ・ ・ ・ ・ と背せの低ひくいのが、滅め入り込こみさうに、大おほきな假か髪づらの頸うなじを寤すくめ、ひつつりさうな拳こぶしを二ふたつ、耳みみの處ところへ威おどすが如ごとく、張はり肱ひざに、確しつ乎かと握にぎつて、腰こしをくなく、と、拔ぬ足あし差さ足あし。

で、目めを据すえ、眉まゆを張はつて、行あん燈どんに擦すり寄より擦すり寄より、  
「はて、何どこに映うつつた顔かほだ知しらん、行あん燈どんか、行あん燈どんか、  
か、 ・ ・ ・ ・ ・ 口くちを利きくなよ、行あん燈どんか。」

と熟ぢうと覗のぞく。

途と端たんに、沈しんんだが、通とほる聲こゑで、

「私わたし ・ ・ ・ ・ ・ 行あん燈どんだよ。」

「わい、」

と叫さけんで、餛うどん饨や屋やは舞ぶ臺たいを飛と退びく。

此この古ふる行あんどん燈が、仇あだも情なきけも、赤あかくこぼれた丁ちやうじ子の如ごとく、煤すすの中なかに色いろを籠こめて消きえずに居ゐて、其それが、針はりの穴あなを通とほして、不ふ意いに口くちを利きいたやうな女をんなの聲こゑには、松まつざき崎もぎよつとした。

餛うどん鈍や屋は吃びつくり驚の呼いき吸を引ひいて、きよとんとしたが、「俺おいらあ可いや厭だせ。」と押おし殺ころした低こゝろ聲で獨ひとりごと言を云いつたと思おもふと、ばさりと幕まく摺すれに、ふらついて、隅すみから蹠よろ跟ろけ込こんで見みえなく爲なつた。

時ときにー私わたし・・・行あんどん燈だよ、ーと云いつたのは、美うつくしい女ひとである事ことに、松まつざき崎も心こゝろつ附いて、ー驚おどろいて樂がく屋やへ遁にげた小こ兒どもの状さまの可を笑かしさに、莞にっこり爾り、笑あみを含むだ、燃もゆるが如ごとき其その女ひとの唇くちびるを見みた。

「つい言いつ丁ちまつたのよ。」  
と紳しんし士しを見み向むく。

「困こまつた人ひとだね、」  
と杖ステッキを取とつて、立たち構がまへをしなから、  
「さあ、行いかうか。」

「可いわ、もう些と．．．．」

「恐怖いよう。」

と子守の袂にぶら下つた小さな兒が、袖を引張つて言ふ。

「こはいものかね、行燈ぢやないわ。．．．．

綺麗な奥さんが言つたんだわ。」と其の子守は背の子を揺り上げた。

舞臺を取巻いた大勢が、わや／＼とざわついて、

同音に、聲を揚げて皆笑つた．．．．小さいの

が二側三側、ぐるりと黒く塊つたのが、變にこゝま

で間を措いて、思出したやうに、遁込んだ饅頭屋の

滑稽な圖を笑つたので、どつと云ふのが、一つ、町

を越した空屋の裏あたりに響いて、壁を隔てゝ聞く

やうにばやけて寂しい。

「東西、東西。」

青月代が、例の色身に白い、膨りした童顔を眞正

面に舞臺に出て、猫が耳を撫でる．．．．ト云

つた風で、手を擧げて、見物を制しながら、おでん

と書いた角行燈をひよいと廻して、ト立直して裏を

見せると、豫て用意がしてあつた……其の小間が藍を濃く眞青に塗つてあつた。

行燈が化けると云つた、此が、かゞみのつもりでもあらう、が、上を蔽うた黒布の下に、色が沈んで、際立つて、丁ど、間近な縁臺の、美しい女と向合せに据ゑたので、雪なす面に影を投げて、媚かしくも凄くも見える。

青月代は翻然と潜つた。

其までは、どれも此も、吹矢に當つて、バツタリと細工ものが顯れる形に、幕へ出入りのひよつこらさ加減、繪に描いた、小松茸、大きな蛤十ばかり一所に轉げて出さうであつたが。

舞臺に姿見の蒼い時よ。

はじめて、白玉の如き姿を顯す……一人の立女形、撫肩しなりと脛をしめつゝ襦を取つた状に、内端に可愛らしい足を運んで出た。絲も掛けない素の白身、雪の鍊絲を繰るやうに、しなやかなものである。

背丈恰好、それも十一二の男の兒が、文金高髻の  
假髮して、含羞だか、それとも芝居の筋の襷染の爲  
か、胸を啣へる俯向き加減、前髪の冷たさが、身に  
染む風情に、すべ／＼と白い肩をすくめて、乳を隠  
す嬌態らしい、片手柔い肱を外に、指を反らして、  
ひたりと附けた、其の頤のあたりを蔽ひ、額も見せ  
ないで、なよ／＼と筵に雪の踵を散らして、靜に、  
行燈の紙の青い前。

綿かと思ふ柔な背を見物へ背後むきに、其の擬へ  
し姿見に向つて、筵に坐ると、しなつた、細い線を、  
左の白脛に引いて片膝を立てた。

此の膝は、松崎の方へ向く。右の搔込んで、其の  
腰を据ゑた方に、美しい女と紳士の縁臺がある。

まだ顔を見せないで、打向つた青行燈の抽斗を抜  
くと、其處に小道具の支度があつた・・・白粉  
刷毛の、夢の覺際の合歡の花、ほんのりとあるのを  
取つて、媚かしく化粧を爲出す。

知つては居ても、其が男の兒とは思はれない。耳  
朶に黒子も見えぬ、滑かな美しさ。松崎は、むざと  
集つて血を吸ふのが傷しさに、蹈臺の蚊を頻に氣に  
した。

蹈臺の蚊は、をかしいけれども、はじめ腰掛けた  
時から、間を措いては、ぶんと一つ、ぶんと又一つ、  
穴から唸つて出る・・・足と足を摺合はせたり、  
頭を掉つたり、避けつ拂ひつして居たが、日脚の加  
減か、此の折から、ぶく／＼と溝から泡の噴く體に

數を増した。

人情、何故か、筵の上の其の皓體に集らせたくな  
いので、背後へ、町へ、兩の袂を叩いて拂つた。

そして、此の血に餓えて呻く蟲の、次第に勢を加  
へたにつけても、天氣模様の憂慮しさに、居ながら  
見渡されるだけの空を覗いたが、何處のか煙筒の煙  
の、一方に雪崩れたらしい隈はあつたが、黒しと怪  
む雲はなかつた。但、町の静さ。板の間の乾びた、  
人なき、廣い湯殿のやうで、暖い霞の輝いて淀んで、  
漾ひ且つ漲る中に、蚊を思ふと、其の形、むら／＼  
波を泳ぐ海月に似て、望を横へて、餓えたる虎の唄  
を唄うて勿ねる。．．．．

此の影がさしたら、四ツ目あたりに咲き掛けた紅  
白の牡丹も曇らう。．．．．嘴を鳴らして、ひら  
り／＼と縦横無盡に踊る。

が、現なの光景は、長閑な日中の、其が極度であ  
つた。――

やがて、蚊ばかりではない、舞臺で狐やら狸やら、

太鼓を敲き笛を吹く．．．．．本所名代の樂器に合はせて、猫が三疋。小夜具を被つて、仁王立、一斗樽の三ツ目入道、裸の小兒と一所に成つて、さす手の扇、ひく手の手拭、揃つて人も無げに踊出した頃は、俄雨を運ぶ機關車の如き黒雲が、音もしないで、浮世の破めを切張の、木賃宿の數の行燈、薄暗いまで屋根を壓して、むく／＼と、兩國橋から本所の空を渡つたのである。

次第は前後した。

此より前、姿見に向つた裸の兒が、濃い化粧で、襟白粉を襟長く、くつきりと粧ふと、カタンと言はして、刷毛と一所に、白粉を行燈の抽斗に藏つた時、しなりとした、立膝のまゝで、見物へ、ひよいと顔を見せたと思へ。

島田ばかりが房々と、呀、目も鼻も無い、のつべらぼう。

唇ばかり、埋め果てぬ、雪の紅梅、蕊白く莞爾した。

はつと美しい女は身を引いて、肩を摺つた羽織の



てさき  
しる／＼、  
手先を白々と紳士の膝へ。

ひたひ  
額も頬も一分、三分、小鼻も隠れたまで、いや塗  
つたとこそ言へ。白粉で消した顔とは思ふが、松崎  
さへ一目見ると變な氣がした。

そこ  
其處へ、件の三ツ目入道、どろ／＼どろと顯れけ  
り。

樽を張子で、鼠色の大入道、金銀張分けの大眼を、行燈見越に立はだかる、と繩からげの貧乏徳利をぬいと突出す。

「丑満の鐘を待兼ねたやい。．．．わりや雪女。」

とドス聲で甲を殺す．．．此の熊漢の前に、月からこぼれた白い兎、天人の落し兒と云つた風情の、一束ねの、雪の膚は、扱は化夥間の雪女であつた。

「これい、化粧が出来たら酌をしろ、えゝ。」  
と、どか胡坐、で、着ものゝ裾が堆い。

其の地響きが膚に應へて、震へる状に、脇の下を窄めるから、雪女は横坐りに、

「あい、」と手を支く。

「そりや、」

と徳利を突出した、入道は懐から、鮑貝を掴取つて、胸を廣く、腕へ引着け、雁の首を捻ぢるが如く白鳥の口から注がせて、

「わりや、わな／＼と震へるが、素膚に感じるか、いやさ、寒いか。」と、じろ／＼と視めて寛々たり。

雪女細い聲。

「はい……冷たうござんすわいな。」

「ふん、其はな、三途河の奪衣婆に衣を剥がれて、まだ間が無うて馴れぬからだ。ひく／＼せずと堪へくされ。雪女が寒いと吐すと、火が火を熱い、水が水を冷い、貧乏人が空腹いと云ふやうなものだ。汝が勝手の我まゝだ。」

「情ない事おつしやいます、辛うて／＼なりませんもの。」

と矢張り戦く。其の姿、あはれに寂しく、生々とした白魚の亡者に似て居る。

「尤もな、わりや……」

言ひ掛けた時であつた。這個見越入道、ふと絶句で、大な樽の面を振つて、三つ目を六つに晃々ときよろつかす。

幕の蔭と思ふ繪の裏で、誰とも知らず、静まつた

藤ふぢの房ふさに、生温なまぬるい風かぜの染しむ氣勢けはひで、

「・・・紅蓮ぐれん、大紅蓮だいくれん、紅蓮ぐれん、大紅蓮だんぐれん・・・

・「と後見うしろみをつけたものがある。

「紅蓮ぐれん、大紅蓮だいくれんの地獄ぢごくに來きたつて、」

と大入道おほにふだうは樽たるの首くびを揺据ゆりすゑた。

「わりや雪女ゆきをんなと成なりをつた。が、魔道まだうの酌取しゃくとり、枕まくら

添ぞひ、藝妓げいしや、遊女ぢよらうのかへ名なと云いふのた。娑婆しやば、人間にんげんの

處女きむすめで・・・」

又絶句またぜつくして、うむと一つ、樽たるに呼吸いきを詰つめて支つかへ

ると、ポカンとした叩頭おじぎをして、

「何なんだつけね、」

と可愛かはいい聲こゑ。

「お稲いな、」

と雪女ゆきをんなが小ちひさく言いつた。

松崎まつさきは耳みみを澄すます。

と同時どうしであつた。

「・・・お稲いな、お稲いなさんですつて、・・・

と目めのふちに、薄うすく、行燈あんどんの青あをい影かげが射さした。美うつく

しい女は、ふと紳士を見た。

「お稻荷、稻荷さんと云ふんだね、白狐の化けた處なんだらう。」

わけもなく恚う云つて、紳士は、ぱつと巻蓑に火を點ずる。

其の火が狐火のやうに見えた。

「あゝ然うなのね。」

美しい女は頷いたのである。

松崎も、聞いて、

成程然うらしくも見て取つた。

「むゝ、其のお稻で居た時の身の上話、酒の肴に聞かさんかい。や、唯わな／＼と震へくさる、まだ間が無うて馴れぬからだ。こりや、」

と肩へ無手と手を掛けると、ひれ伏して、雪女は溶けるやうに然と泣く。

十四

「陰氣だ／＼、此奴滅入つて氣が浮かん。こりや、  
汝等出て燥げやい。」

三ツ目入道、懐手の袖を刎ねて、鮑貝の杯を、大  
く弧を描いて樂屋を招く。

此の合園に、相馬内裏古御所の管絃。笛、太鼓に  
鉦を合はせて、トツピキ、ひやら、ひやら、テケレ  
ンどん、幕を煽つて、どや／＼と異類異形が踊つて  
出でた。

狐が笛吹く、狸が太鼓。猫が三疋、赤手拭、すつ  
とこ被り、吉原被、一寸吹流し、と氣取るも交つて、  
猫ぢや／＼の拍子を合はせ、トコトンと筵を踏むと、  
塵埃立交る、舞臺に赤黒い渦を巻いて、吹流しが腰  
をしやなりと流すと、すつとこ破りが、ひよいと刎  
ねる、と吉原被りは、ト招ぎの手附。

狸の面、と、狐の面は、差配の禿と、青月代の假  
髪のみ、鬘鈍屋の半白頭は、どつち付かず、鬘の  
やうな面を着て、此が鉦で。

時々、きち／＼きち／＼と云ふ。狐はお定りのコ  
ンを鳴く。狸はあやふやに、モウと唸つて、膝にの  
せた、腹鼓。

囃子に合はせて、猫が三疋、踊る、踊る、いや踊  
る事わ。

青い行燈と其の前に突伏した、雪女の島田のまは  
りを、ぐるり／＼と廻るうちに、三ツ目入道も、ぬ  
いと立つて、のし／＼と踊出す。

續いて囃方惣踊り。フト合方が、がらりと替つて、  
樂屋で三味線の音を入れた。

――必ず此の事、此の事必ず、丹波の太郎に沙汰  
するな、此の事、必ず、丹波の太郎に沙汰するな――

と揃つて、異口同音に呼ばはりながら、水車の舞  
込む如く、次第ひきに、ぐる／＼ぐる。・・・・・  
幕へ衝と消える時は、何ものか居て、操りの絲を引  
手繰るやうに颯と隠れた。

筵舞臺に残つたのは、青行燈と雪女。

悄しれて、一ひと人、唯たゞ、うなだれて居ゐるのであつた。  
上うへなる黒くろい布ぬのは、ひら／＼と重おもく成なつた．．．．  
空そらは化物ばけものどもが惣踊そうをどりに踊をどる頃ころから、次第しだいに黒くろく成な  
つたのである。

美うつくしい女ひとは、はづして、膝ひざの上うへに手首てくびに掛かけた、  
薄色うすいろのシヨオルを取とつて、撫肩なでがたの頸うなじに掛かけて身繕みづくろひ。  
此方こなたに松崎まつざきも最もう立たたうとした。

青月代あをさかやきが、ひよいと覗のぞいた。幕まくの隙間すきまへ頤あごを乗のせ  
て、

「誰だれか、おい、前掛まへかけを貸かしてくんな、」と見物けんぶつを  
左右さいうに呼よんだ。

「前掛まへかけを貸かしておくれよ、．．．．よう、誰だれ  
も。」

美うつくしい女ひとから、七八人にん小兒こどもを離はなれて、二人ふたり並ならんで  
居ゐた子守こもりの娘むすめが此これを聞きくと眞先まっさきにあとしさりをした。  
言譯いひわけだけでも赤あかい紐ひもの前掛まへかけをして居ゐたのは、其その二人ふたり  
ぐらゐなもので、．．．．他たは皆みな、横撫よこなでの袖そでと  
くひこぼしの膝ひざ、光ひかるのは唯垢たゞあかばかり。



かたはら  
傍から、また餛飩屋が出て舞臺へ立つた。

「此から女形が演處なんだせ。居所がはりに成る  
んだけれど、今度は亡者ぢやねえよ、活きてる娘の  
役だもの。裸では不可えや、前垂を貸しとくれよ。」

誰か、

「後生だつてば、」

と青月代も口を添へる。

こもり  
子守の娘は又退つた。

幼い達は妙にれて、舞臺の前で、土をいぢつて  
俯向いたのもあるし、ちよろ／＼町の方へ立つのも  
あつた。

「吝れだなあ。」

餛飩屋がチヨツ、舌打する。

「貸してくれつてんだぜ、……屹と返すツ  
てえに。……可哀相ぢやないか、雪女に成つ  
たなりで裸で居ら。此の、お稲さんに着せるんだ  
よ。」

と青月代も前へ出て、雪女の背筋のあたりを冷た  
さうに、ひたりと叩いた……

「前掛まへかけでなくては。不可いけないの？」

美しい人うつくしひとはすつと立たつた。

紳士しんしは仰向あをむいて、妙めうな顔色かほつき。

松崎まつざきの、うつかり歸かへられなく成なつたのは言いふまで

もなからう。

「兄さん、他のものぢや間に合はない？」

あきれ顔な舞臺の二人に、美しい女は親しげに然う云つた。

「他の物つて、」と青月代は、ちよんぼり眉で目をぱちくる。

「羽織では。」

美しい女は華奢な手を衣紋に當てた。

「羽織なら、ねえ、おい。」

「あゝ、そんな旨え事はねえんだけれど、前掛でさへ、しみつたれて居るんだもの、貸すもんか。それだしね、羽織なんて誰も持つてやしませんぜ。」

と饅頭屋は吐出すやうに云ふ。成程、羽織を着たものは、ものゝ缺片も見えぬ。

「可ければ私のを、貸してあげるよ。」

美しい女は、言の下に羽織を脱いだ、手のしなひは、白魚が柳を潜つて、裏は篝火がちらめいた、雁がねむすびの紋と見た。

「品子さん、」

紳士は留めようとして、づつと立つ。

「可いのよ、貴方。」

と見返りもしないで、

「帯がないぢや無いか、さあ、此が可いわ。」と  
一所に肩をよこした、其の白と、薄紫と、山が霞ん  
だやうな派手な羅のシヨオルを落して遣る……

雪女は、早く心得て、ふはりと其の羽織を着た、  
黒縮緬の紋着に緋を襲ねて、霞を腰に、前へすらり  
と結んだ姿は、恰も可し、小兒の丈に裾を曳いて、  
振袖長く、影も三尺、左右に水が垂れるばかり、其  
の不思議な媚しさは、貸小袖に魂が入つて立つたと  
も見えるし、行燈の灯を覆うた襦袢の袂に、蝴蝶が  
宿つて、夢が彷徨とも見える。

「難有う、」

「奥さん難有う。」

互に、青月代と饅頭屋が、假髪を叩いて喜び顔。

雪女の、其の……擬へた……姿見に向つて立つ後姿を、美しい女は、と視めて、

「島田も可いこと、其れなりで角かくしをさしたいやうだわ……あゝ、でも扱帯を前帯ぢや何う。遊女のやうではなくつて、」

「構はないの、お稲さんが寢衣の處だから、」  
「あゝ、一寸。」

と美しい女が留める間に、聞かれた饅饨屋はツイと引込む。

「あら、矢張りお稲さん、お稲さんですわ、貴方。」

と言ふ。紳士を顧みた美しい女の睫が動いて、目が屹と引緊つた。

「何、稲荷だよ、おい、稲荷だらう。」

紳士も並んで、見物の小兒の上から、舞臺へ中折を覗かせた。

「ねえ、此の人の名は？……」

黒縮緬の雪女は、さすが一座に立女形の見識を取つたか、島田の一さへ、端然と濟まして口を利かう

としないので、美しい女は又青月代に、然う訊いた。

「嵐お萩ツてえの・・・東西々々、  
と翻然と隠れる。」

「藝名ではない。役の娘の名を聞かしておくれ、  
何て云ふの、よ、お前。」

と美しい女は、やゝ急込んで言つて、病身らしく  
胸を壓へた。脱いだ羽織の、肩寒さうな一枚小袖の  
嬌姿、雲を出でたる月かと視れば、離れた雲は、  
雪女に影を宿して、墨繪に艶ある青柳の枝。

春の月の凄きまで、蒼青な、姿見の前に、立直つ  
て、

「お稲です。」  
と云つて、ふと見向いた顔は、目鼻だち、水に朧  
なものではなかつた。

舞臺は居所がはりに成るのだ、と樂屋のものが云つた、――俳優は人に知らさないのを手際に、化ものゝ踊るうち、俯向伏して居る間に、玉の曇を拭つたらしい。・・・・眉は鮮麗に、目はぱつちりと張を持つて、口許の凜とした。・・・・やゝ強いが、妙齡のふつくりとした、濃い生際に白粉の際立たぬ、色白な娘の其の顔。

松崎は見て悚然とした。・・・・

名さへーお稲ですー

肖たとは迂哉。今年如月、紅梅に太陽の白き朝、同じ町内、御殿町あたりの或家の門を、内端な、しめやかな葬式に成つて出た。・・・・其の日は霜が消えなかつた――居周圍の細君女房連が、湯屋でも、髪結でも尚だ風説を絶さぬ、お稲ちゃんと言つた評判娘に肖如なのであつた。

「私も今はじめて聞いて吃驚したの。」

其の時、松崎の女房は、二階へばた／＼と駈上り、

御注進と云ふ處を、鎧が綺の半纏で、草摺短な格子  
の前掛、ものが無常だけに、ト手は翻さず、乃ち尋  
常に黒縹子の襟を合はせて、火鉢の向うへ中腰で細  
く成る．．．．．

髪も櫛巻、透切れのした縹子の帯、此の段何とも  
致方がない。亭主、號が春狐であるから、名だけは  
蘭菊とでも奢つて置け。

春狐は小机を横に、座蒲團から斜に成つて、

「へーい、些とも知らなかつた。」

「私もさ．．．．今ね、内の出窓の前に、お隣  
家の女房さんが立つて、通の方を見てしく／＼泣い  
て居なさるから、何うしたんですつて聞いたんです。  
可哀相に．．．．お稲ちゃんのお葬式が出る所だ  
つて、他家の娘でも最惜くつて爲やうがないつて云  
ふんでせう。ー然う云へば成程何だわね、此の節  
ぢや多日姿を見なかつたわね、よくお前さん、それ、  
あの娘が通ると云ふと、箸をカチリと置いて出窓か  
ら、お覗きだつてがね。」



苦笑ひで、春狐子。

「餘許な事を言ひなさんな、．．．．しかし  
惜いね、一寸ないぜ、此處等には、あのくらゐな一  
枚繪は。」

「うっかり下町にだつてあるもんですか。」

「などゝ云ふがね、お前もお長屋月並だ。．．．

・生きてるうちは、然うまでは讚めない奴さ、顔  
が些と強すぎる、何のつてな。」

「えゝ、それは廂髪でお茶の水へ通つてた時です  
わ。最う去年の春から、娘に成つて、島田に結つて  
からと云つたら、．．．．そりや、くひつきた  
いやうだつたの。」

髪のいゝ事なんて、尤も盛も盛だけれども。」

「幾歳だ。」

「十九．．．．明けてゝすよ。」

「あゝ、」

と思はず煙管を落した。

「勿論、お婿さんは知らずらしいね。」

「えゝ、其のお婿さんの事で、まあ亡くなつたん  
ですよ。」

はつと思ひ、

「や、自殺か。」

「おほ吃驚した……慌てるわねえ、お前さん。否、自殺ぢやないけれども、私の考へだと、矢張り同一だわ、自殺をしたのも。」

「ぢや何うしたんだよ。」

「其がだわね。」

「焦つたい女だな。」

「ですから静にお聞きなさいなね、稻ちゃんの内ぢや、成りたけ内證に秘して居たんださうでなければ、あの娘はね、去年の夏ごろから——其の事で——狂氣に成つたんですつて。」

「あの、綺麗な娘が。」

「眞個ねえ。」

と俯向いても一つ半纏の襟を合はせる。

十七

「妙齡で、あの容色ですからね、もう先から、いろ／＼縁談もあつたさうですけれど、お極りの長短して居た處、お稲ちゃんが二三年前まで上つて居なすつた……でも年二季の大温習には高臺へ出たんださうです……長唄のお師匠さんの橋渡しで。」

家は千駄木邊で、お父さんは陸軍の大佐だか少將だか、それで非職てるの。其の息子さんが新しい法學士なんですつて……其處からね、是非、お嫁さんに欲いつて言つたんですとさ。

途中で、時々顔を見合つて、最う見合ひなんか濟んでるの。男の方は大變な惚方なのよ。尤も家同士、知合ひと云ふんでも何でもないんですから、口を利いたことなんて、そりやなかつたんでせうけれど、ほんに思へば思はるゝとやらだわね。」

半纏着の蘭菊は、指のさきで、火鉢の縁へ一寸當つて、

「お稲ちゃんの方でも、嬉しくない事はなかつたんでせう。……でね、内々其の氣だつたんだつて、……お師匠さんは云ふんですとさ、――隣家の女房さんの、これは談話よ。」

まだ卒業前ですから、お取極めは、いづれ學校が濟んでからツて事で、のび／＼に成つて居たんださうですがね。

去年の春、お茶の水の試験が濟むと、さあ、其の翌日にも結納を取替はせる勢で、男の方から急込んで來たんでせう。

けれども、此方ぢや煮切らない、と云ふのがね――あの、娘にはお母さんがありません。お父さんと云ふのは病身で、滅多に戸外へも出なさらぬ、何でも中氣か何からしいんです――後家さんで、其の妹さん、お稲ちゃんには叔母に當る、お婆さんのハイカラが取締つて、あの娘の兄さん夫婦が、すつかり内の事を遣つて居るんだわね。

其の兄さんと云ふのが、何とか云ふ、朝鮮にも、滿洲とか、臺灣にも出店のある、大な株式會社に、

才子で勤めて居るんです。

其の何ですとさ、會社の重役の放蕩息子が、ダイヤの指輪で、春の歌留多に、ニチャリと、お稲ちゃんの手を壓へて……おほ可厭だ。」

と拂ふ眞似して、

「それで、落第、最う澤山。」

「何うだか。」

「眞個ですとも。それから其のニチャリが、」

「右のな、」

と春狐は、あゝと歎息する。

「えゝ、ぞつこんと成つて、お稲ちゃんを斷つて

と云ふの、此には嫂が一はながけに乗つたでせう。」

「極りで居やあがる。」

「大分、お芝居に成つて來たわね。」

「餘計な事を言はないで……それから、」

「兄さんの才子も、矢張り其の氣だもんですからね、愈々と云ふ談話の時、きつぱり兄さんから斷つて了つたんですつてー無御縁とおあきらめ下さ

い、か何かでさ。」

「其の法學士の方をだな、――無い御縁が凄じいや、てめえが勝手に人の縁を、頤にしゃぼん玉の泡沫を塗つて、鼻の下を伸ばしながら横撫でに粧やあがる西洋剃刀で切つたんぢやないか。」

「ねえ……鬱いで居ましたとき、お稲ちやんは、初心だし、世間見ずだから、口へ出しては何にも言はなかつたさうだけれど……段々、御飯が少なくなつてね、好きなものも些とも食べない。」

其の癖、身じまひをする事つたら、髪も朝に夕に撫でつけて、鬢の毛一筋こぼして居た事はない。肌着も毎日のやうに取替へて、缺かさずに湯に入つて、綺麗にお化粧をして、寝る時は屹と寝白粉をしたんですつて。

皓齒に紅よ、凄いやうぢやない事、夜が更けた、色艶は。

そして二三度見つかりましたとき。起返つて、帯をお太鼓にきちんとめるのを――お稲や、何をおしだつて、叔母さんが咎めた時、――私はお母さんの許へ行くの――

然さう云いつてね、枕まくら許もとへちやんと坐すわつて、ぱつちり  
目めを開あけて天井てんじやうを見みて居ゐるから、起おきてるのかと思おも  
ふと、現うつで正しやう體たいがないんですとさ。

思おも詰ひつめたものだわねえ。」

「またね。危あぶないつてないの。聞きいても、ひや／＼するのはね、夜中よなかに密そつと箆たんす笏すの抽斗ひきだしを開あけたんですよ。

「法學士はふがくしの見合みあひの寫眞しやしん？

「否いへ、そんなら可いいけれど、短刀たんたうを密そつと持もつたの、お母かあさんの守護まもりがたな刀たださうですよ。．．．．．そんな身みだしなみのあつたお母かあさんの娘むすめなんだから、お稻いなちやんの、あの、きりゝとして．．．．．妙齡としころで可か愛いい中なかにも品ひんの可よかつた事ことを御覽ごらんなさい。」

「餘あまり言いふのはよせ、何なんだか氣きを受うけて、それ、床とこの間まの花はなが、」

「あれ、」  
と見み向むく、と朱鷺ととき色いろに白しろの透すがしの乙女をとめ椿つばきがほつりと一輪りん。

熟ちつと視みたが、狭せまい座敷ざしきで袖そでが届とく、女房にやうぼうは、くの字じに身みを開ひらいて、色いろのうつるやう掌てのひらに据すゑて仰向あをむいた。



隙間もる冷い風。

「あゝ、四四辻がざわ／＼する、お葬式が行くんですよ。」

と前掛の片膝、障子へ片手。

「二階の欄干から見る奴があるものか。見送るなら門へお出な。」

「止ませう、おもひの種だから……」  
と胸を抱いて、

「此の一輪は蔭ながら、お手向けに成つたわね。」  
と、鼻紙へ密と置くと、冷い風に淡い紅……  
女心は慙くやらむ。

窓の障子に薄日が映した。

「ぢや死なうと云ふ短刀で怪我でもして、病院へ入つたのかい。」

「否、それは最う、家中で要害が嚴重よ。寝る時には、切れものと云ふ切れものは、そつくり一つ所へ藏つて、錠をおろして、兄さんが其の錠を握つて寝たんだつて言ふんですもの。」

「はゝあ、重役の忤に奉つて、手繰りつく出世の蔓、お大事なもんですからな。……会社でも

鍵を預る男だらう。あの娘の兄と云へば、まだ若からうに何の眞似だい。」

「お稻ちゃんは、又そんなで居て、しく／＼泣き暮らしてゞも、お在だつたかと思ふと、然うぢやないの……精々裁縫をするんですつて。自分のものは、肌のものから、足袋まで、綺麗に片づけ、火熨斗を掛けて、ちやんと藏つて。それなり手を通さないでも、ものゝ十日も経つと、又出して見て洗ひ直すまでにして、頼まれたものは、兄さんの嬰兒のおしめさへ折りめの着くほど洗濯してさ。」

「おや／＼、兄の嬰兒の洗濯かね。」

「嫂と云ふのが、ぞろりとして何にもしやしませんやね。また一寸ふめるんだわ。そりやお稻ちゃんの傍へは寄附けもしませんけれども。其でもね、妹が美しいから、負けないやうにつて、――何う云ふ了筒ですかね、兄さんが容色望みで娶つたつて云ふんですから……」

小兒は二人あるし、家は大勢だし、小體に暮して居て、別に女中つても居ないんですもの、お守りか

「は、何から、皆お稲ちゃんが生んだわ。」  
「は、あ、其の兒だ……」

「兎もすると、――其が夕暮が多かつた――嬰兒を背負つて、別にあやすでもなく、結ひたての島田で、夕化粧したのが、顔をまつすぐに、清い目を二つて、蝙蝠も柳も無しに、何を見てもなく、熟と暮れかゝる向側の屋根を視めて、其家の門口に、いむだ姿を、松崎は兩三度、通りがりに見た事がある。」

面影は、其の時の見覚えで。

「出窓の硝子越に、娘の方が往かへりの節などは、一體傍目も觸らないで、竹をこぼるゝ露の如く、すい／＼と歩行く振、打水にも襖のなづまぬ、はで姿、と思ふばかりで、其はよくは目に留まらなかつた。」  
「が、思ひ當る……葬式の出たあとでも、お稲は其の身の亡骸の、白い柩で行く状を、あの、門に一人立つて、さも恍惚と見送つて居るらしかつた。」

女房は語續けたー

「お稻ちゃんが、そんなに美しく身のまはりの始末をしたのも、あとで人に見られて恥かしくないやうに躑んで居たんだわねーそして隙さへあれば、直ぐに死ぬ気で居たんでせう、寢しなにお化粧をするのなんか。」

ですから、病院へ入つたあとで、針箱の抽斗にも、疊紙の中にも、皺に成つた千代紙一枚もなく・・・油染みた手柄一掛もなかつたんですつて。綺麗にして置いたんだわ・・・友達から来た手紙なんか、中には焼いたのもあるんですつて・・・心掛けたぢやありませんか。惜まれる娘は違ふわね。

ぐつと取詰めて、氣が違つた日は、晩方、髪結さんが来て、鏡臺に向つて居た時ですつて。夏の事でね、庭に紫陽花が咲いて居た所爲か、知らないけれど、其の姿見の蒼さつたら、月もさゝなかつたつて云ふんですがね。ー而して、お稻ちゃんの其の時

の顔ぐらゐ、色の白いつて事は覚えないうんですと  
さー

髪結さんが、隣家の女房へ談話なんです。

同一のが廻りますからね。

隣家と、お稲ちゃん許と、同一のは、そりや可い  
けれど、まあ、飛んでもない事……其の法  
學士さんの家が、一つ髪結さんだつたんでせう。だ  
もんだから、つい、其の頃、法學士さんに、餘所か  
らお嫁さんが来て、……箱根へ新婚旅行をし  
て歸つた日に頼まれて行つて、初結ひをしたつて事  
を……可ござんすか……お稲ちゃんの  
島田を結ひながら、髪結さんが話したんです。」

「あゝ、悪い。」

と春狐は聞きながら、眉を顰めた。一體傍目も  
觸らないで、竹をこぼるゝ露の如わね。

同じやうに、打鬢んで、蘭菊は、つげの櫛で鬢  
の毛を、ぐいと撫でた。

「……氣を附けないと……何でも髪  
結さんが、得意先の女の髪を一一條づゝ取つて来て、  
内證で人のと人のと結び合はせて藏つて置いて御覽

なさい。

世間は直ぐに戦争よりは餘計に亂れると、私、思ふんですよ。

お稲さんは黙つて俯向いて居たんですつて。左挿しに、毛筋を通して銀の平打を挿込んだ時、先が突刺りやしないかと思つた。はつと髪結さんが拔戻した發奮で、飛石へ力チリと落ちました。……

「ー口惜しいーとお稲ちゃんが言つたんですつて。根揃へ自慢で緊めたばかりの元結が、プツツリ切れ、背中へ音がして颯と亂れたから、髪結さんは尻餅をつきましたとさ。

でも、髪結さんは、あの娘の髻の事ばかり言つて惜がつてるさうですよ。あんな、美しい、柔軟な、艶の可い髪は見た事がないつてね、ー死骸を病院から引取る時も、恚う横に抱いて、看護婦が二人で擔架へ移さうとすると、背中から、づつとかゝつて、裾よりか長うござんしたつて……。眞個に丈にも餘ると云ふんだわね。」

「あゝ……聞いても惜い……何のた  
めに、髪までそんなに美しく世の中へ生れて来たん  
だ。」

春狐は思はず、詰るが如く急込んで火鉢を敲いた  
。

「ねえ、私にだつて分りませんわ。」

「で、何うしたんだい。」

「お稻ちゃんは、髪を結つた、其の時切、夢中な  
の。別に駈出すの、手が掛るのつて事はなかつたん  
ださうですけど、唯さへ細つた食が、最うまるツ  
切通りますまい。」

「賺しても、叱つても。」

「しやうがないから、病院へ入れたんです。お醫師  
さんも初から首をお傾げだつたさうですよ。」

「まあね、それでも出来るだけ手當をしたにはした  
さうだけれど、矢張り、……ねえ……  
おとむらひに成つて了つて——」

「と薄りした目のふちが、颯とさめると、ほろりと  
する。」

春狐は肩を聳かした。

「成つたんぢやない・・・葬式にされたんだ。殺されたんだよ。だから言はない事ぢやない、言語道斷だ、不埒だよ。妹を餌に、鱈が瀧登りをしようなんて。」

「えゝ、然うよ・・・ですからね、兄つて人もお稻ちゃんが病院へ入つて、もう不可いつて云ふ時分から、酷く何かを氣にしてさ。嬰兒が先に死ぬし、それに、此の葬式の中だ、と云ふのに、嫂だわね、御自慢の細君が、又どつと病氣で寝て居るもんだから、あゝ稻がとりに來たとりに來たつて、蔭では然う云つて居ますとさ。」

「待つて居た、然うだらう。其の何だ、ハイカラな叔母なんぞを血祭りに、家中塵殺ひたい。次手にお父さんの中氣だけ治してな。」

と妙に笑つた。

「まあ、」



と目を二つて、

「串戯ぢやないわ、人の氣も知らないで。」

「無論、串戯ではないがね、女言濫りに信ずべからず、半分は嘘だらう。」

「否！」

「まあさ、お前の前だがね、隣の女房と云ふのが、又、兎角大袈裟なんですからな。」

「勝手になさいよ、人に散々饒舌らしといて、嘘ぢやないわ。ねえ、お稲ちゃん、女は女同士だわね。」

と乙女椿に頬摺りして、鼻紙に据ゑて立つ・・・

實は其さへ身に染みた。

床の間にも残つたが、と見ると、蒼の堅いのと、幽に開いた二輪のみ。

「一寸、お待ち。」

「何、」と襖に手を掛ける。

「でも、少し氣に成るよ、肝心、焦れ死をされた、法學士の方は、別に聞いた沙汰なしかい。」

「先方でもね、お稲ちゃんが其の容體だつてのを

聞いて、それは／＼氣の毒がつてねー法學士さんと云ふのが、其の若い奥さんに、眞に成つて言つたんだつてーお前は二度目だ。後妻だと思つてくれ。お稲さんとは、確に結婚したつもりだつてー」

春狐はふと黙つて、其には答へず……

「あゝ、其の椿は、成りたけ川へ。」

「流しませうね、一寸拜んで、」

と二階を下りる、……其の一輪の朱鷺色さへ、消えた娘の面影に立つた。が、幻ならず、最も目に刻んで忘れないのは、あの、夕暮を、門に立つて、恍惚空を視めた、凡そ宇宙の極まる所は、艶やかに且つ黒き其の一點の秘密であらうと思ふ、お稲の雙の瞳であつた。

同じ其の瞳である。同じ其の面影である。……

ーお稲ですー

と云つて、振り向いた時の、舞臺の顔は、剩へ、凝へたにせよ、向つて姿見の眞蒼なと云ふ行燈があらうではないか。

美しい女は屹と紳士を振向いた。

「貴方。」

若い紳士は、杖を小脇に、細い筒袴で、伸掛つて

覗いて、

「稲荷だらう、おい、狐が化けた所なんだらう。」

と中折の廂で押つけるやうに言つた。

羽織に、シヨオルを前結び。又それが、人形に着

るせたやうに、しつくりと姿に合つて、眞向きに直

つた顔を見よ。

「否、私はお稲です。」

紳士は、蹴られたやうに、縁臺へ退つた。

美しい女の褙は、眞菰がくれの花菖蒲、で、すらり  
と筵の端に掛つた……

「あゝ、お稲さん。」

と、恰も其の人のやうに呼びかけて、

「然う。そして、何うするの。」

お稲は黙つて顔を見上げた。

小さな其の姿は、丁度、美しい女が、脱いだ羽織  
をしなやかに、肱に掛けた位置に、なよ／＼として

見える。

「止せ！品子さん。」

「可いわ。」

「見つともないよ。」

「私は構はないの。」

「ねえ、お稲さん、何うするの。」

と又優しく聞いた。

「何うするつて、何、小母さん。」

役者は、ために羽織を脱いだ御鼻肩に對して、舞臺ながらもおとなしい。

「あのね、此の芝居は何う云ふ脚色なの、其れが聞きたいの。」

「小母さん見て在らつしやい。」  
と云つた。

其の間も、縁臺に掛けたり、立つたり、若い紳士は氣が氣ではなさうであつた。

「おい、最う歸らうよ、暗く成つた。」  
雲にも、人にも、松崎は胸が轟く。

「待つてゝ下さい。」

と見返りもしないで、

「見ますよ、見るけれどもね、一寸聞かして下さいな。ね、いゝ兒だから。」

「だつて、言つたつて、芝居だつて、同一なんで

すもの、見て在らつしやい。」

「急ぐから、先へ聞きたいの、えゝ、不可い。」

お稲は黙つて頭を掉る。

「まあ、強情だわねえ。」

「強情ではござりませぬ。」

と思ひがけず幕の中から、皺がれた聲を掛けた。

美しい女は瞳を注いだ、松崎は衝と踏臺を離れて立

つた。――其の聲は見越入道が絶句した時、――紅

蓮大紅蓮とつけて教へた、目に見えぬものと同じで

あつた。

「役者は役をしますのぢや。何も知りませぬ。貴

女がお急ぎであらばの、衣裳をお返し申すが可い。」

と半は舞臺に指揮をする。

「否、羽織なんか、何うでも可いの、たゞ私、氣

に成るんです。役者が知らないなら、誰でも構ひま

せん。差支へなかつたら聞かして下さい。一體此處

は何處なんです。」

「六道の辻の小屋がけ芝居ぢや。」

と幕が動くやうに向うで言つた。

松崎は、思はず紳士と目を見合つた。小兒なぞは眼中にない、男は二人のみだつたから。

美しい女は、却つて恐れ氣もなく恚う言つた。

「あゝ、分りました、そしてお前さんは？」

「いろ／＼の魂を瓶に入れて持つて居る狂言方ぢ

や。斷つて望みならば聞かせようかの。」

「えゝ、何うぞ。」

と少々しいのが、あはれに聞えた。

「其處へ………髮結が一人出るわいの。」

松崎は骨の硬く成るを知つたのである。

「それが、其のお稻の髪を結ふわいの。髮結の口

からの、若い男と、美しい女と、祝言して仲の睦し

い話をするのぢや。

其の男と云ふのは、聞かつしやれ。お稻の戀ぢ

やわいの、命ぢやわいの。

もう／＼今までとてもな、腹の汚い、慾に眼の眩

んだ、兄御のために妨げられて、雙方で思ひ思つた、

繋がる縁が繋がれぬ、其の切なさで、あはれや、か

ぼそい、白い女が、紅蓮、大紅蓮、………」

あゝ、可厭な。

「阿鼻焦熱の苦惱から、手足がはり、肉を切こまざいた血の池の中で、悶え苦んで、半ば活き半ば死んで、生きもやらねば死にも遣らず、死にも遣らねば生きも遣らず、呻き惱んで居た所ぢや。」

まだ萬に一つもと、果敢い、細い、蓮の絲を頼んだ縁は、其の話で、鼠の牙にフツツリと食切られたが、・・・

ドンと落ちた穴の底は、狂氣の病院入ぢや。此の段替ればいの、狂亂の所作ぢやぞや。」

と言ふ。風が添ったか、紙の幕が、煽つー煽つ。お稻は言につれて、すべき科を思つたか、振が、手にうつかり乗つて、恍惚と目を睜つた。・・・



「何うするの、其から。」

細い、が透る、力ある音調である。美しい女の其の聲に、此の折から、背後のみ見返られて、雲のひた染みに蔽ひかゝる、棧敷裏とも思ふ町を、影法師の如く漸く人脚の繁く成るのに氣を取られて居た、松崎は、又目を舞臺に引附けられた。

舞臺を見返す瞬間に、むかうから、先刻の編笠を被つた鴉のやうな新粉細工が、ふと身を起して、うそ／＼と出て来るのを認めた。且つ其が、古綿のやうにむく／＼と、雲の白さが一團残つて、底に幽に蒼空の見える・・・遙かに遠い所から、たとへば、ものゝ一里も離れた前途から、黒雲を背後に曳いて襲ひ来る如く見て取られた。

それ、最う其處に、編笠を深く、舞臺を覗く。

何時の間にか歸つて来て、三人に床凡を貸した古女房も交つて立つ。

彼處に置捨てた屋臺車が、主を追うて自ら軋るか  
と、響が地を舐つて、轟々と雷の音。繪の藤も風に  
颯と黒い。其の幕の彼方から、紅蓮、大紅蓮の其の  
聲、舌も赤う、ひらめくと覺えて、めら／＼と饒舌  
る。 . . . .

「まだ後が聞きたうござりますか。お稲は狂死に  
死ぬるのぢや。や、ぢやが、家眷親屬の餘所で見  
眼には、鼻筋の透つた、柳の眉毛、目を絲のやうに、  
睫毛を黒う塞いで、の、長煩らひの死ぬ身には塵も  
据らず、色が抜けるほど白いばかり。然まで瘦せも  
せず、苦患も無しに、家眷息絶ゆるとは見たれども、  
の、心の裡の苦痛はよな、人の知らぬ苦痛はよな。  
其の段を芝居で見せるのぢや。」

「そして、後は、」  
と美しい女は、白い両手で、確と紫の襟を壓へた。  
「死骸に成つての、空蝉の藻脱けた膚は、人間の  
手を離れて牛頭馬頭の腕に上下から掴まれる。や、  
其處を見せたい。其の娘の假髪ぢや、お稲の髪には  
念を入れた。 . . . . 島田が亂れて、絲も切も

かゝらぬ膚を黒く輝く、吾が天女の後光のやうに包むを見さい。未は踵に餘つて曳くぞの。

鼓草の花の散るやうに、娘の身體は幻に消えても、其の黒髪は、金輪、奈落、長く深く残つて朽ちぬ。百年、千歳、失せず、枯れず、次第に伸びて艶を増す。其の髪千筋一筋づゝ、獸が食へば野の草から、鳥が啄めば峰の花から、同じお稻の、同じ姿容と成つて、一人づゝ世に生れて、又同一年、同一月日に、親兄弟、家眷親屬、己が身勝手な利慾のために、戀をせかれ、情を破られ、縁を斷られて、同一思ひで、狂死するわいの。あの、厄年の十九を見され、五人、三人一時に亡せるぢやらうがの。死ねば思ひが黒髪に残つて其の一筋が又同じ女と生れる、生きかはるわいの。死にかはるわいの。

其の誰も皆揃うて、親兄弟を恨む、家眷親屬を恨む、人を恨む、世を怨む、人間五常の道亂れて、黑白も分かず、日を蔽ひ、月を塗る……魔道の呪詛ぢや、何と！魔の呪詛を見せますのぢや、其處をよう見さつしやるが可い。

お稲の髪の毛の、乱れて摩く處をなう。」

「死んだお稲さんの髪が亂れて……」

と美しい女は、衝と鬢に手を遣つたが、ほつれ毛よりも指が揺いで、

「そして、其からはえ？」

と屹と言ふ。

「此方、親があらば叱らされう。よう、それから聞きたがるの、根問ひをするのは、愛嬌が無うてようないぞ。女子は分けて、うら問ひ葉間をせぬものぢや。」

雲の暗さが増すと、あたりに黒く艶が映す。

其の中に、美しい女は、聲も白いまで際立つて、  
「否、聞きたい。」

「たつて聞きたくばの、恚うさしやれ。」

幕の蔭で、間を置いて、落着いて、

「お稲の芝居は死骸の黒髪の長いまでぢや。此處では知らぬによつて、後は去んで、二度添どのに聞かつしやれ、二度添ひの女子に聞かつしやれ。」

「二度添とは？ 何です、二度添とは。」

扱帯を手繰るやうに繰返して問返した。

「か、知らぬか、なう。二度添とはの、二度目の妻の事ぢや。男に取替へられた玩弄の女子ぢや。古い手に摘まれた、新しい花の事いの。後妻ぢや、後妻と申しますものぢやわいなう。」

ト一度引かゝつたやうに見えたが、ちらりと筵の端を、雲の影に踏んで、美しい女の雪なす足袋は、友染凄く舞臺に乗つた。

目を明かに凝と視て、

「其の後妻とは、二度添とは誰れ、其處に居る人。」と肩を斜め、手を、錆びたが楯の如く、行燈

に確と置く。

「おほ／＼、誰や知らぬ、其の二度添と云ふのはの、．．．．お稲が望が遂げなんだ、縁の切れた男に、後で枕添と成つた女子の事いの。．．．．娑婆はめでたや、蟲の可い、其の男はの、我が手で水を向けて、娘の心を誘うて置いて、弓でも矢でも貫かう心はなく、先方の兄者に、たゞ斷り言はれたゞけで指を銜へて退つたいの、其の上への。

我勝手や。娘がこがれ死をしたと聞けば、おのれが顔をかゞみで見ると、自惚れての。何と早や懷中に抱いた氣で、お稲は其の身の前妻ぢや。――

との、まだお稲が死なぬ前に、ちやツと祝言した花嫁御寮に向うての、――お主は後妻ぢや、二度目ぢやと思つておくれい、――との。何と蟲が可からうが。其の芋蟲に又早や、臺も蕊も嘗められる、二度添どのもあるわいの。」

と言ふかと思ふ、聲の下で、

「ほ／＼／＼」

と口紅がこぼれたやうに、散つて舞ふよと花やかに笑つた。

あゝ、膚が透く、心が映る、美しい女の身の震ふ影が隈なく衣の柳條に搦れた。

「歸らう、品子、何をしとる。」

紳士はづか／＼と寄つて、

「詰らん、さあ、歸るんです、歸るんだ。」

とせり着くやうに云つたが、身動きもしないのを見て、堪りかねた體で、ぐいと美しい女の肩を取つた。

「歸らんですか、おい、歸らんのか。」

其の手は衝と袖で拂はれた。

「貴方は何です。女の身體に、勝手に手を觸つて

可いんですか。他人の癖に、……。」

「何だ、他人とは。」

「憤氣に成ると、……。」

「舞臺へ、靴で、誰、お前は。」

先刻から、たゞ柳が枝垂れたやうに行燈に凭れて居た、黒紋着の其の雪女が、りと成つて、兩手で紳士の胸を壓した。

トはつとした體で、よろ／＼と退つたが、腰も据

らず、ひよろついで来て絶るやうに寄つたと思ふと、  
松崎は、不意にギクと手首を持たれた。

「貴方を、伴侶、伴侶と思ひます。あ、あ、あの、  
樂屋の中が、探險、……」

紳士は探險と言つた。

「た、た、探險したい。手を貸して下さい。御、  
御助力が願ひたい。」

「其はよくない。不可ません。見物は、みだりに  
芝居の樂屋へ入るものではないんです。」

「そ、そんなら、妻を一人の見る前、夫が力づ  
くでは見つともない。貴方、連出して下さい、引張  
出して下さい、願ひます。僕を、他人だなんて僕  
を、……妻は發狂いました。」



「否、御心配には及びません。」

松崎は先んじられた……そして美しい女は、淵の測り知るべからざる水底の深き瞳を、鋭く紳士の面に流して、

「私は確です。發狂するなら貴方がなさい、御令妹のお稲さんのために。」

と、爽かに言つた。

「私とは、他人なんです。」

「他人、何だ、何だ。」

と喘ぐ。

「ですが、私に考へがあつて、一寸知己に成つて居たばかりなんです。」

美しい女は、そんなものは、と打棄る風情で、屹と又幕に向つて立直つた。

「其處に居る人……お前さんは不思議に、よく何か知つておいでだね、地獄、魔界の事まで御存じだね。豪いだね。でも惡魔、變化ばかりではない、人間にも神通があります。私が問うたら、お前

さんは、去つて聞けと言ひましたね。

私は即座に、其の二度添、其のうはなり、其の後妻に、今こゝで聞きました。・・・

お稲さんが亡く成つてから、あとの其の後妻の芝居を、お前さんに聞かせませうか。聞かせませうか。それともお前さんは御存じかい。」

幕の内、

「臙氣ぢや、冥土の霧で臙氣ぢや。はつきりした事を聞きたいなう。」

「えゝ、聞かしてあげませう。――男に取替へられた玩弄は、古い手に摘まれた新しい花は、はじめは何にも知らなかつたんです。清い、美しい、朝露に、旭に向つて咲いたのだと人なみに思つて居ました。ですが、蝶が来て、一所に遊ぶ間もなかつたんです。」

お稲さんの事を聞かされました。玩弄は取替へられたんです、花は古い手に摘れたんです・・・・男は、潔い白い花を、後妻に成れと言ひました。

贅澤です、生意氣です、行過ぎて居ます。思つた

戀を爲すげないで、引込んだら斷念めれば可い、其のために戀人が、然うまでにして、生命を棄てたと思つたら、自分も死ねば可いんです。死ななければ、死んだ氣に成つて、お念佛を唱へて居れば可いんです。

力が、男に足りないで、殺させた女を前妻だ、と一人極めにして、其の上に、新妻を後妻に成れ、後妻にする、後妻の氣で居れ、といけ酒亞々々として、髪を光らしながら、鱧髭の生えた口で言ふのは何事  
でせうね。」

「愈々發狂だ、人の前で見つともない。」  
紳士は肩で息をした、其の手は松崎に縋つて居る。 . . .

「え、人の前で、見つともないと云つて、此處には幾人居ます。指を折つて數へるほどでもない。夫が私を後妻にしたのは、大勢の前、世間の前、何千人、何萬人の前だか知れませんか。」

夫も夫、お稻さんの戀を破つた。其處においでの

他人も他人、皆、女の仇です。

幕の中の人、お聞きなさい。

二度添にされた後妻はね・・・それから夫の言に、故と喜んで従ひました。

涙を流して同情して、一層、後妻と云ふんなら、お稲さんの妹分に成つて、お稲さんにあやかりませう。其のうまれ代はりに成りませう、と云つて、表向き次手を求めて、お稲さんの實家に行つて、そして私を――其の後妻を――兄さんの妹分にして下さい、と言つたんです。

其處に居る他人は、涙を流して喜びました。尤も、そこに居るやうなハイカラさんは、少い女が、兄さん、とさへ云つて遣れば、何でも彼でも涙を流すに極つて居ます。

私は精々と出入りしました。先方からも毎日のやうに来るんです。そして、兄さん、兄さんと、云ふうちには、屹と袖を引くに極つて居るんです。然も奥さんは永々の病氣の處、私は其が望みでした。」

射<sup>い</sup>て、橋<sup>はし</sup>に輝<sup>かざ</sup>くか、と衝<sup>つ</sup>と町<sup>まち</sup>を徹<sup>とほ</sup>つた。  
電<sup>いな</sup>が、南<sup>みな</sup>辻<sup>みつ</sup>橋<sup>ばし</sup>、北<sup>きた</sup>の辻<sup>つじ</sup>橋<sup>ばし</sup>、菊<sup>きく</sup>川<sup>かは</sup>橋<sup>ばし</sup>、撞<sup>しゆ</sup>木<sup>もく</sup>橋<sup>ばし</sup>、川<sup>かは</sup>を

「其の望みが叶つたんです。」

そして、今日も、夫婦のやうな顔をして、二人づれで、お稲さんの墓参りに来たんですー夫は、私が恚うするのを、お稲さんの靈魂が乗りうつたんだと云つて、無性に喜んで居るんです。

殺した妹の墓の土もまだ乾かないのに、私と一所に、墓参りをして、御覽なさい、裁下ろしの洋服の襟に、乙女椿の花を挿して、お稲は、恚う云ふ娘だつたと、平氣で言ひます。

其の氣ですからね。」

紳士の身體は靴を刻んで、搖上がるやうだつたが、ト松崎が留めたにも係はらず、くわツと握拳を壓へて、横なぐれに倒れさうに成つて、忽ち射るが如く町を飛んだ。其の状は、人の耳見る目に可笑くあるまい、礫の如き大粒の雨。

雨の音で、寂寞する、と雲にむせるやうに息が詰つた。

「幕の内の人、」

美しい女は、吐息して、更めて呼掛けて、

「お前さんが言った、其の二度添ひの談話は分つ

たんですか。」

「其から、」

と雨に濡れたやうな聲して言ふ。

「此が知れたら、男二人は何うなります。其の親

兄弟は？ 其の家族は何うなると思ひます。其が幕

なのです。」

「扨て、其の後は何う成るのぢや。」

「あら……」

もどかしや。

「お前さんも、根問をするのね。それで可いでは

ありませんか。」

「いや、可うないわいの、まだ肝心な事が残つた

ぞ。」

「肝心な事つて何です。」

「はて、此方も、」

雨に、つと口を寄せた氣勢で、

「知れた事ぢや……肝心の其の二度添どの

は何うなるいの。」

聞くにも堪へし、と美しい女の眦が上つた。

「えゝ、廻りくどい！ 私ですよ。」

と激した状で、衝と行燈を離れて、横ざまに幕の出入口に寄つた。流るゝやうな舞臺の姿は、斜めに電光に颯と送られた。・・・

「分つて居るがの。」

と鷹揚に言つて、

「扱ぢや、此方の身は果は何う成るのぢや。」

「・・・」

ふと黙つて、美しい女は、行燈に、悄乎と残つた

お稲の姿に其の眦を返しながら、

「お前さんの方の芝居は？此の女は何う成る幕です。」

「おいの、・・・や、紛れて聲を掛けたんだぢやで、お稲は殊勝氣に舞臺ぢやつた。――雨に濡れうに、折角の御見物ぢや、幕切れだけ、ものを見せうな。」

と言ふかと思ふと、唐突にどろ／＼と太鼓が鳴つた、音を絢交ぜに波打つ雷鳴る。



猫が一疋と鼬が出が出た。

ト無慙や、行燈の前に、仰向けに、一個が頭を、  
一個が白脛を取つて、宙に釣ると、縮ねの緩んだ扱  
帯が抜けて、紅裏が肩を、辻つた・・・雪女は  
細りとあからさまに成つたと思ふと、すらりと落し  
た、肩なぞへの手を枕に、がつくりと頸が下つて、  
目を眠つた。其面影に颯と影、黒髪が丈に亂れて、  
舞臺より長く敷いたのを、兇惡異變な面二つ、たゞ  
面の如く行燈より高い所を、ずる／＼と引いて、  
美しい女の前を通る。

幕に、それが消える時、風が擲つが如く、虚空か  
ら、一雨交りに、電光の青き中を、朱鷺色が八重  
に縫ふ乙女椿の花一輪。はたと幕に當つて崩れもせ  
ず・・・お稲の玉なす胸に留まつて、忽ち隠れ  
た。

美しい女は筵に爪立つて身悶えしつゝ、

「お稲さんは、お稲さんは、此から何う成るんで  
す、何う成るんです。」

「むゝ、くどいの、あとは魔界のものぢや。雪女

と成つての、三つ目入道、大入道の、酌なと伽なと  
せうぞいの。わは、と、  
と笑つた。

美しい女は、額を當て、幕を掴むで、  
「生意氣な事お言ひでない。幕の中の人、悪魔、  
私も女だよ、十九だよ。お稲さんと同じ死  
骸に成るんだけど、誰が、誰が、酌なんか、  
・・・可哀相にお稲さんをー女がね、女はね、そ  
んな弱いものぢやない。私を御覽。」

はた、はた、神。

南無三寶、電光に幕あるのみ。

「あれえ。」と聞えた。

瞬間、松崎は猶豫つたが、棄て置かれぬのは、續  
いて、編笠した烏と古女房が、衝と幕を揚げて追込  
んだ事である。

手を掛けると、觸るものなく、篠つく雨の簾が落  
ちた。

唯見ると、聲のしたものは何も見えない。三つ目

入道、狐、狸、猫も黽もごちや／＼と小さく固まつて居たが、松崎の殺進に、氣を打たれたか、ばら／＼と、奥へ遁げる。と果しもなく野原の如く廣い中に、塚を崩した空洞と思ふ、穴がぼか／＼と大きく窪んで、蜂の巢を擴げたやうな、其の穴の中へ、すぼん、と一個づゝ飛込んで、ト貝鮓と云ふものめく・・・頭だけ出して、ケラ／＼と笑つて矢せた。

何等の魔性ぞ。這奴等が群り居た、土間の雨に、引巻られた衣の綾を、驚破や、蹂躪られた美しい女かを見ると、帯ばかり、扱帯ばかり、花片ばかり、葉ばかりぞ亂れたる。

途端に海のやうな、眞晝を見た。

廣場は荒廢して日久しき染物屋らしい。縦横に並んだのは、いづれも繪の具の大瓶である。

あはれ、其の、せめて紫の瓶なれかし。鐵のひゞわれた如き、遠くの壁際の瓶の穴に、美しい女の姿があつた。頭を編笠が抱へた、手も胸も、面影も、しろ／＼と、あの、舞臺のお稻其のまゝに見えたが、

たゞ既に空洞へ入つて、底から足を曳くものがあらう、美しい女は、半身を上曲げて、腰のあたりは隠れたのである。

雪のやうな胸には、同じ朱鷺色の椿がある。

叫んで、走り懸ると、瓶の區割に躓いて倒れた手に、はつと留南奇して、ひや／＼と、氷の如く觸つたのは、まさしく面影を、垂れた腕にのせながら土間を敷いて、長く其處まで靡くの認めた、美しい女の黒髪の末なのであつた。

此の黒髪は二筋三筋指にかゝつて手に残つた。

海に沈んだか、と目に何も見えぬ。

四ツの壁は、流るゝ電と輝く雨である。とゞろ／＼と鳴るかみは、大灘の波の唸りである。

「おでんやーおでん。」

戸外を行く、然も女の聲。

我に返つて、這ふやうに、空屋の木戸を出ると、

雨上りの星が晃々。

後で傳へ聞くと、同一時、同一所から、其の法學士の新夫人の、行方の知れなく成つたのは事實と

か。・・・松崎は實は、うら少い娘の餘り果敢  
なさに、龜井戸詣の歸途、其の界限に、名譽の巫子  
を尋ねて、其のくちよせを聞いたのであつた・・・  
・靈の來つた状は秘密だから言ふまい。魂の上る  
時、巫子は、空を探つて、何もない所から、弦にかゝ  
つた三筋ばかりの、長い黒髪を、お稻の記念ぞとて  
授けたのを、兎やせむとばかりで迷の巷  
黒髪は消えなかつた。

【完】